

## 論文内容の要旨

専攻名 (課程名)	多文化社会学専攻 (博士前期課程)	氏名	濱崎 悠花
題名	中近世移行期長崎の都市運営		
<p>本研究は、中近世移行期をとおして、長崎がどのようにして幕藩制国家に適応するかたちへと変容したのかを明らかにすることを目的に、長崎の地役人のうち「町年寄」に着目し、中近世移行期の長崎における都市運営を検討するものである。</p> <p>元亀二年（一五七一）、長崎港に初めてポルトガル船が入港したことを契機に、長崎は国際貿易港となった。「長崎開港」により、貿易港となった長崎の町には、さまざまな背景を持つ人々が往来し、長崎は港湾都市へと発展した。また、幕藩制国家の成立に向かう秩序形成に伴い、長崎は中世的自治都市から近世都市へと変容した。「長崎開港」以降、長崎の都市運営を担ってきたのは、現地採用された「地役人」であった。近世長崎の行政組織が最終的に確立するのは、唐人屋敷や長崎会所などの設定や、内町・外町の区分廃止が行われた元禄期（一六八八―一七〇三）とされている。</p> <p>従来長崎の都市史研究は、近世中後期長崎の貿易都市としての構造や機能の側面について、特に都市運営の担い手である都市住民や地役人に着目して進められてきた。しかし、行政組織の確立期にあたる元禄期以前の都市運営や、その担い手となる地役人に着目した都市史研究は多くない。また、宗教統制や貿易統制などの、長崎が近世都市として解決すべき特有の問題は、元亀二年の「長崎開港」に起因することから、中近世の連続的な検討や、分野の横断的検討が必要であるが、これらの問題は時代別・分野別に研究が進められてきた。</p> <p>中近世移行期の長崎における都市運営や行政機構の変遷など、幕藩体制に組み込まれる以前の長崎に関する都市史研究や地役人の研究については検討が不足している状況を踏まえ、本研究では、元亀二年の「長崎開港」当初から長崎の都市運営に関わってきた地役人「町年寄」と、元禄十二年（一六九九）の内町・外町区分廃止に伴い町年寄に吸収され</p>			

た「常行司」の二つの役職に着目して検討を行った。内町・外町の区分廃止を一つの区切りとして、「長崎開港」当初から長崎の都市運営に関わってきたと考えられる役職である町年寄の成立の背景と職務の変遷を検討することにより、中近世移行期の長崎の都市運営がどのように移り変わってきたのかを明らかにすることができると考えた。

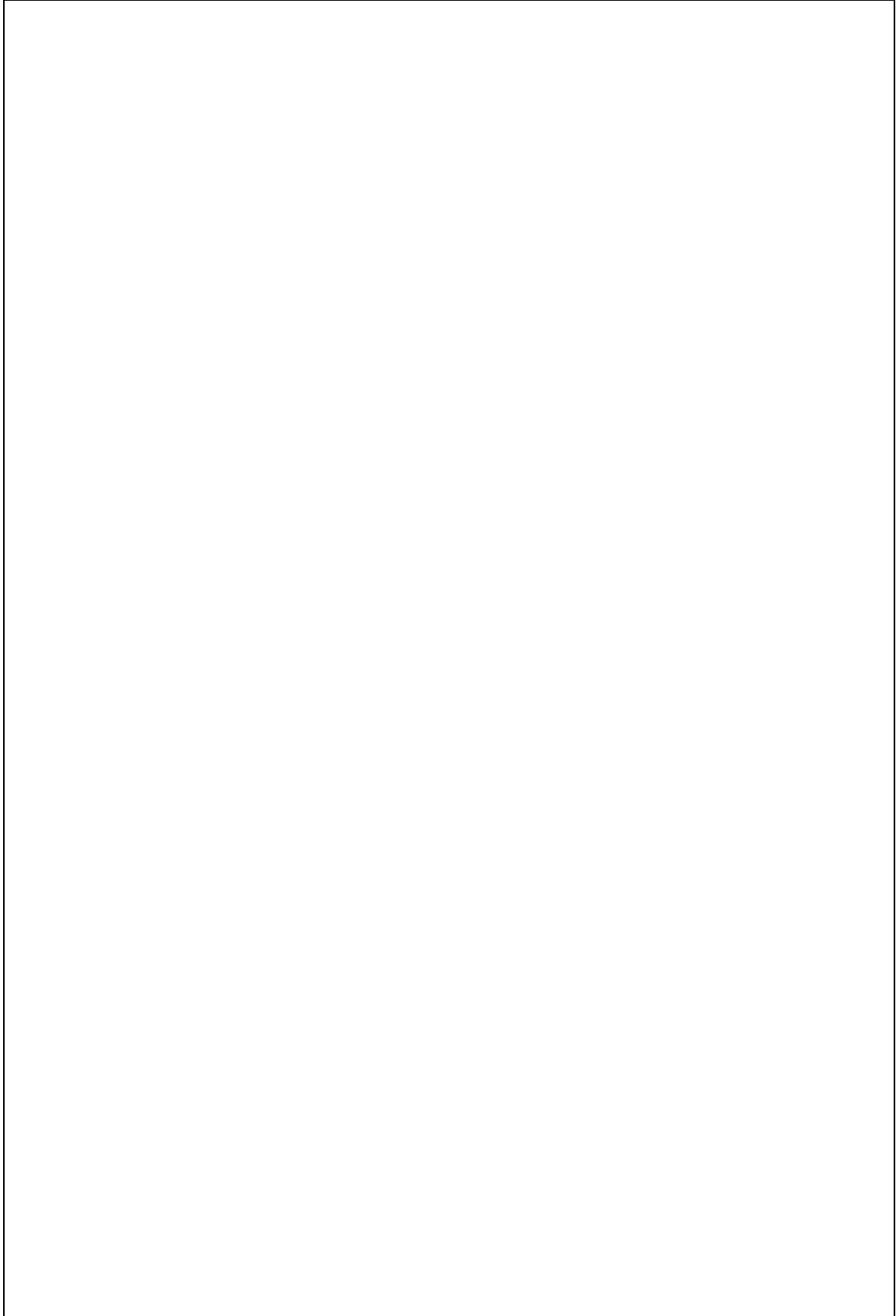
第一部「地役人の成立」では、近世都市長崎が成立するために解決すべき長崎特有の問題が、元亀二年の「長崎開港」に起因することから、開港当初から長崎の都市運営に関わってきた地役人「町年寄」と、元禄十二年（一六九九）に町年寄に吸収された「常行司」の二つの役職の成立について検討した。元亀二年の「長崎開港」以降に自然発生した頭人を起源とする町年寄の成立背景には、貿易とキリスト教の影響が大きかったことを明らかにした。

第二部「地役人の職務」では、「町年寄」の担った職務について検討した。町年寄の職務には、自発的に勤めてきた職務と、命じられて勤めるようになった職務があり、町年寄の担ったとされる職務の多くは、幕藩体制の整備過程につくられた職務であったことを明らかにした。

元亀二年の「長崎開港」以降、長崎は都市住民によって自治的に運営されてきたが、江戸幕府は、在地有力者であった頭人を前身とする町年寄を幕藩制国家の支配制度に取り込むことにより、長崎を近世社会に適応するかたちへと再編しようとした。町年寄の成立や職務の整備は、長崎を幕藩体制に組み込むために不可欠であったと考えられる。つまり、中近世移行期長崎の都市運営は、長崎の地役人制度の整備を通じて、幕藩制国家の支配制度に即した近世都市運営へと再編されたと言える。

本稿では、町年寄の成立と職務に着目することで、中近世移行期長崎の都市運営の一端を明らかにした。博士後期課程では、町年寄の日常的な業務に関する断片的な史料を調査し、町年寄の遂行した職務の具体像を追求したい。また、都市運営全体を把握するためには、町年寄以外の役職についても検討する必要がある。長崎代官や町乙名など、元禄期以前に成立した他の役職にも視野を広げ、中近世移行期長崎の都市運営を担った諸地役人の役割分担や相互関係についても検討し、長崎が幕藩制国家に適応した近世都市として成立する過程において、どのように都市運営が展開されていったのかをより立体的に明らかにしたい。長崎全体の都市運営の動向が明らかになれば、どのように都市が形成されていったのかを解明する手掛かりとなると考える。

※作成に当たっては、文字は10.5ポイントでA4用紙2枚以内とする。



※作成に当たっては、文字は10.5ポイントでA4用紙2枚以内とする。